

凡ての科学の自立性は、その対象の自立性と、これに対する一定の見方(Perspective)態度、(Attitude)が要求される。そして一定の対象を、一定の見地からながめることによって、これを規定する一定の学的方法が定まる。しかも対象の性質は、これに必ず一定の態度を要求し、反対に態度は対象の性質に適合せねばならない。この対象と態度の関係からして、対象を規定する一定の方法が生れる。かくて方法とは、研究の対象に適合した(angemessen)問題提出及び問題解決の仕方である。従って対象の性質を無視した。対象に適合しない方法は、方法というべきでない。

しかもこの方法は純粋性を要求する。方法の純粋性とは、対象とその規定とが、矛盾なき連関をもつことである。かくて凡ての学の成立には、この対象の独自性、即ちその科学が固有な対象領域を有すること、方法の純粋性によって初めて確保せられると考えられる。仮りに家政学が学として存在することをゆるすとすれば、その独自の対象は何んであるか。この固有の対象を規定する方法は如何なるものか。又、対象と方法をむすぶ対象に対する態度はどんなものであるべきか。以上の問題は学としての家政学に問われねばならない問題である。これらの問題の解決なくして、家政学の客観的基盤はありえないし、家政学は成立し得ない。